

審査の結果の要旨

戦後日本における朝鮮人美術家たちの表現の模索
——1945年から1962年まで

論文提出者氏名 白 凜

本論文は、戦後日本における在日朝鮮人美術家の集団的な活動を分析し、その活動の意義とそのもとで発表された美術作品について論じたものである。対象時期は、1945年以降、在日本朝鮮文学芸術家同盟美術部発行による『在日朝鮮美術家画集』が出版された1962年を一応の区切りとしており、検討の対象となった美術家は、主にこの画集に作品を載せた、ないしはこの画集を発行した団体に参加した在日朝鮮人たちである。構成は、「はじめに」と、第一章～第八章、「おわりに」のほか、在日朝鮮人美術家の作品や関連写真の図31点、作品の展覧や団体の活動状況についての表9点、人名一覧、参考文献一覧を付したものとになっている。

論文の内容を簡略に述べると次のようである。「はじめに」では、在日朝鮮人美術家の活動についての先行研究の少なさ、関連資料や作品自体の発掘が十分でないことを指摘し、それについての本格的な研究を行う必要性を述べる。これに続く本論は、歴史編、造形編、記録編の3部構成となっている。歴史編のうち、第一章では、日本敗戦以降、日本にいた朝鮮人美術家が連絡を取り、緩やかな集まりを持つとともに、やがて在日朝鮮人美術会（座日本朝鮮文化芸術家同盟美術部の前身）を結成し、どのように描くかを論じあっていたことやテーマ制作等の活動を展開したことを述べる。第二章は、日本人美術家との交流、そのもとでの在日朝鮮人美術家の日本アンデパダン展への出品、日朝友好展の開催等の事実を明らかにする。第三章では、朝鮮半島の南北分断という状況に規定されて、別々のグループを形成していた在日朝鮮人美術家たちが、1960年と1961年に「連立展」として合同で美術作品を発表する場を持ったこととその意義について記している。造形編では、まず、第四章で在日朝鮮人美術会所属の代表的な画家の作品を取り上げて論じ、在日朝鮮人の生活やそこでの苦悩が反映されていることを指摘している。第五章は、集団的にあるテーマを設定して描かれた作品を分析したもので、南朝鮮の民主主義を求める活動や北朝鮮帰国運動を取り上げ、それに深い関心を寄せて作品を描いていたこと、それらの作品が一つひとつは個性的であるとの分析が示されている。第六章は、民族団体の機関紙の連載漫画を描いていた漫画家とその作品を取り上げ、それらが、在日朝鮮人の文化継承や祖国への思いが反映されたものとなっていたことが記されている。記録編は、第七章が在日朝鮮人美術家団体の機関誌『朝鮮美術』のうち、現存するものの内容の紹介であり、第八章が、在日朝鮮人美術家やその遺族、彼らとかかわりを持った日本人の証言から把握できることの記述である。そして、「おわりに」では、本文の論述をまとめたうえで、在日朝鮮人美術家たちの活動が、朝鮮半島の平和と、日本に住む朝鮮半島にルーツを持つ者の平穏な日々を願って続けられていたとの結論を記している。そのうえでさらに、当該時期の在日朝鮮人美術家たちの議論のなかで出てくる用語や、民族団体、美術教育との関係、ほかの美術作

品との比較分析等が必要であり、資料の発掘や関係者からの聞き取りを継続して進めるべきことが述べられている。

以上のような内容の本論文については、審査委員から次のような評価が与えられた。

まず、なによりこの論文は、在日朝鮮人美術家の活動と作品についての、はじめての本格的な学術研究であり、その点で多大な意義を持っている。在日朝鮮人の歴史についての研究は、比較的蓄積を持つ社会運動史研究や生活史研究、独自の領域を形成している在日朝鮮人文学の研究に加えて、近年、映画や音楽等についての着目した研究も出始めている。しかし、在日朝鮮人の美術活動については、そもそもあまり知られておらず、少数の美術家やいくつかの作品について論じたものがあるにとどまっていた。また、日本美術史研究でも、マイノリティに着目して研究を進めることはほとんど行われてこなかった。これは、在日朝鮮人美術家の作品自体、関連資料自体、美術館や関連施設等に保存されているものが少数であり、所蔵状況が不明であったことが大きい。そうしたなかで、本論文の筆者は、これまで知られていなかった、多数の作品、文献資料を発掘し、50名に及ぶ関係者の聞き取りという、地道な調査を行った。しかもその調査は、日本国内の美術館や大学等だけでなく、また日本国内の美術家と遺族等のみを対象としたものでもない。本論文の筆者は、使命感を持って、国際関係にも起因する様々な困難を乗り越えて、韓国や朝鮮民主主義人民共和国をも訪れて、関係者との信頼関係を築きながら調査を進めた。その結果として、これまで知られていなかった関連資料と作品が発掘され、本論文で紹介、分析されることとなった。また、取り上げられた在日朝鮮人美術家の渡日の経緯や交友関係等を含む、ライフヒストリーにも、ほとんど知られていなかった事実が多数含まれる。在日朝鮮人美術家団体についても、結成の経緯や役員の変遷、活動の方針等が本論文によってはじめて跡付けられた。こうしたことから、本論文は、在日朝鮮人美術史の研究の土台を築いたものであり、今後、在日朝鮮人美術についての研究を語る際にならざるべし参照されるべき研究成果となったことは間違いない。

また、戦後日本の美術史でこれまで語られていなかった重要な事実を発掘したという点でも意義を持つ。さらに、本論文で提示されている分析は、他のディアスポラの芸術活動やポストコロニアリズムにかかわる研究においても、考えていくべき問題を提示しているものである。

ただし、本論文について、審査委員からはいくつかの疑問や問題点も述べられた。まず、在日朝鮮人美術家の動向それ自体は明らかになったものの、それと同時代の日本社会や在日朝鮮人社会の状況との関係、朝鮮民主主義人民共和国の美術界の動向の影響等について、より詳細な分析と記述が必要であったという指摘がなされた。また、在日朝鮮人美術家たちの議論のなかで語られる、「民族美術」や「社会主義リアリズム」がどのようなものであったのかが、必ずしも明確ではないという指摘があった。民族美術という問題では、なぜ、水墨画や文人画ではなく油絵という表現での作品がほとんどであるのかということも重要な問題である。さらに、社会主義リアリズムについては、同時代の日本の美術評論の参照が求められるほか、それが指し示すものについて、どこを経由しどのようにして彼らが受容していたかを調査する必要も述べられた。さらに、具体的に造形分析を行っている作品がより多くてもよいという意見や、ほかの様々な作品との比較性、植民地期との連続性についての検討がなされていないこと、さらに、分析の時期を論文タイトルでは1962年までとしているのにもかかわらず、それ以降の時期の作品についても取り上げられていること

を問題とする指摘もあった。

以上のように、本論文には、若干の不足点、解明すべき課題としてなお残る点はある。しかし、それらは、本論文の意義を損なうものではない。そして、それらのいくつかは、前述のように、この論文が在日朝鮮人美術家の活動を、丹念に跡付けた作業の結果として、はじめて見えてきたことでもある。その意味でも、本論文は、重要な研究成果であることが確認できる。

以上のことから、本審査委員会は、本学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。